

聖書の眞理

第七十七號

八月號

主筆 江原萬里

仰臥雜感

私の生涯の経験、死に直面して

鎌倉講演

クロムウエル

九つの柱

汝自身たれ

柏木通信

看護しつゝ

鎌倉講話會の事

急告

江原萬里

塚本虎二

三谷隆正

齋藤宗次郎

江原祝

昭和八年八月一日發行

○病苦に苦しみつゝ無暗に之を家人に告げて、彼等をも共に無益の苦に引入るゝことは悪し。家人看護の勞苦を病者の前に語るはよろしからず。病者は寢乍ら家人の心勞と身勞とを察知して之に感謝すべし。家人は専ら病者の病苦のため己を忘れて彼に同情すべし。こゝに暗黒の病床は化して同情と感謝の滿つる華園となるなり。病久しく、苦しみ相増すも心は居乍ら春野を拔渉するが如し。○急激なる發作の苦悶のため身は那落到轉落する。眼前に在るものは、暗黒、冷酷、審判、死の世界、此の時は如何なるものも己が靈魂を安ぜしめることは出来ない。側から家人が「大丈夫ですよ、神様がゐらつしやるから」之で我が靈魂は暗黒に光明を發見した。苦中この事を忘れて苦しんだのであつた。側に信仰の人あるは死との闘争に最も力強い。

○私は此の度程、肉體の激烈なる苦痛を永く且つ連續的に嘗めた事はない。實を云ふと私の現狀は肉體的に必ずよくなるとの希望は大してない。然し今程心の中に平安と歡喜と而して來世に對する希望をもつた事もない。

○否そのみではない。今周圍の人々から受ける友愛を滿喫して、こんなに心に感謝のあることも亦尠ない。母妻、又身内の者の献身的看護には之を思ふて涙が出る。そのみではない。一友來りて宿泊し、勤務の餘暇全部を私のために献けて居てくれる。姉妹は來り、私を慰め友は日々遠方から見舞つてくれる。面會出来ないだけが残念だ。會へばきつと熱が高まる。

○トラフアルガーの海戰の將に開始されやうとする時、英國の水師提督ネルソンは全艦隊に合圖して云つた「英國は、各員その義務を果すことを期待す」と、彼は艦上に在つて敵弾に斃るゝや、「神よ、感謝す、私は義務を果しました」と。

○私は私の友人なる基督者に勸める。現在の暗黒時に當り各自その義務を果されたしと、私自身については「神よ感謝す、私は義務を盡しました」と云ひ得る。いつか爲さねばならないと豫てから期して居た義務を果した。最早心に何の思ひ残すこともない。若し此の後尙生存する生命を與へられたら、新なる義務を命ぜられたのである。それを果すまでは、此の地で再び働くであらう。主は榮光の冠をもつて待ち給ふことを信ずる。

聖書之眞理

第七十號

昭和八年八月一日發行

私の生涯の經驗

私の半生は病弱の生涯である。一切の悪しき事もそして又善き事も亦此の病弱から來て居る。六年の實業小僧生活から學府に入る事に決定した時、第一に私を訪れ之を祝福してくれたものは何であらう。爾來その手から脱却することの出来ない此の病弱であつた。此の病弱は私を大學から追ひ出し、最も恐れた傳道師にしてくれた。

私が大學を辭して雜誌「思想と生活」を發行した。そして未だ半歳を経ない中に重い肋膜炎に襲はれ、其の年の三分の二を病床に過した。然し乍ら、病床から起き上つた時には私は本當に雜誌を發行して世に訴ふべき何者か偉大なる眞理を得たと確信するに至つた。此の時以後

私の書くものを其の前後の雜誌を注意して讀まれた者は私の靈的經驗の躍進を見逃されぬであらう。

次に「思想と生活」を「聖書の眞理」と改題し、積極的に傳道の途に出づるや、一年を出でざる中、私の音聲が涸れ、ある帝大の専門の醫師から喉頭結核の診斷を受けた。然るに私は普通致命症と云はれる此の病氣から回復し、再び何の支障なく聖書を講じ得るやうになつて、更に一段神と親しき者となつた。少なくとも此の病氣なかりせば、私のエレミヤ研究の著述は出來なかつたであらう。

私は音聲の回復を以て、神は尙私を以て人々に聖書の眞理を説かしめ給はんとする御意であると感じた。それ故此の度公開の集會を創じたのであつた。私が之を決心するに至つた時、私は過去の生涯の經驗を思ひ出し、屹度私は再び重病に襲はれるであらうと豫期し、姉にもその事を書き送つた。今やそれが事實となつて顯はれた。今私は病床に仰臥し、病苦に呻吟して居る。最早當分私は集會に出る希望はない。否或る醫師は家人に告げて最

早回復不可能と云つたそうである。

然し乍ら私は之を聞いて驚かず、憂えず、希望を失はなかつた。過去の私の経は驗何物か將來に新しい希望の存することを思はしめる。多分私は此の病氣で更らに深く靈的事實に接することが出来るであらうと思ふ、神の御意ならばそれを語るため、尙幾年かの地上の生命を延ばし給うであらうと感ぜられる。假令然らずして今召されても亦寸分も悔ゆるところはない。病床に仰臥し、肉體は病苦にさいなまれ乍ら、心は驚くべき平安である。美はしい別の世界が眼前にちらつく。

死に直面して

或る日横向きに約半時間を費して普通の米飯軽く一杯を何度となくよく嚙んで食つて非常につかれた。忽ち身體に異變の來た事を感じた。腰部以下足まで虚脱状態となり、手も亦殆ど感覺を失つた。只はつきりわかるのは激しい息づかい、心臓の脈搏は破れるやうに早い。附添の看護婦それと見て急に醫師を呼び、その來るまでに五

本のカンフル注射をした。

私は此の時程死の前味を味はつた事はない。意識は甚だ鮮明であつた。激しい息づかい、心臓の驚くべき活脈全身の虚脱状態、その中に在つて、もうぢき心臓が麻痺してそのまゝ死が來るやうに思はれた。その來るのは今か今かと思つた。來る前に只一言此の世に云ひ遺して死なうと思ひ、益々荒れ狂ふ心臓の活躍をちつと注視した。

此の肉體の生と死との激しい闘争に際し、私が本當に感じた事は人間には死を願はず、飽くまで生き度いと云ふ念がどの位根強くあるかであつた。あゝ神よ、御心ならば此の危機を過ぎ去らせ給へと只そのみが祈であつた。其時死は最暗黒であつた。私は死の彼方に何物かを感じ、それで來世を安心して居るのではない。最暗黒の死、我が神、我が神、何ぞ我を棄て給ふやと絶叫し給うたキリストが死から甦り給うた故に、復活を安心し得るのである。私のためかくまで暗黒の死を苦しみ、私の永遠の義のために甦り給うた彼あるから、安じて私の靈魂を彼に委ねて死し得る。パウロは云つた。若しキリスト甦り給はざりせば、汝らの信仰もまた空しからん。と。

鎌倉講演 (四)

江原萬里

第四講 クロムウエル

王の處刑

私はクロムウエルが軍人として驚くべき天才であつた事については詳しく述べません。兎に角彼が居ずば、清教徒は一時英國を支配することは出来ませんでした。

クロムウエルは始めから王政を廢して共和政治とする考は毛頭ありませんでした。只王が英國の現状を正しく認識し、人民の自由を尊重し、不當の課税をやめ、殊に彼の所謂『神の民』の信仰を認め、自由に神に仕へる事を妨げさへしなければ、王に悦服したのであります。

然るに王は今や議會軍に捕虜となつて居る事すら忘れ英國の憲法では王の同意なくしては何事も出来ない事を

善い氣にして、言を左右に托して議會や軍隊の要求を一切顧みませんでした。他方王がかく頑迷なのに刺激されて、クロムウエルの軍隊中にはリルバーン一派の過激思想が起りました。之は主權は元來君主になく人民に在ると云ふ之より後百年、佛蘭西革命を起した思想であります。彼等は王との交渉は一切無用、速に王を廢して共和政治を布けと主張しました。

此の一派は最初はクロムウエルに心服して居ましたが次第にクロムウエルに對して疑惑の念を懷くやうになりました。彼等の眼にはクロムウエルは王に媚び、軍隊を王に賣りつけるもとして映じました。此の頃クロムウエルは誤解と誹謗との渦中に居りました。それは一つは彼の政治上の意見が度々變つたからでもあります。元來クロムウエルに取つては、政治上の形體や、國家の組織などは『パウロの云ふ如く、キリストに比べては塵芥に過ぎない』ものであります。それ故國家の諸制度や社會の組織の變更を最大事と考へる一派に對しては、『此の世の事についてそう向きに争ふ必要はない。若し國中の

者が各々自分の考へて居る政體を實現しやうとしたならば、國家は荒れ廢つて仕舞ふ」と云ひました。

クロムウエルは何が神の聖意であるか、それを知り、それを行ふこと以外に何物もありません。然かも或る者が確信を以て、神の聖意は王政を廢し共和國にする事である、自分は神の啓示を受けたと云ふ者に對しては、「我等は誰でも動もすれば自分の肉なる想像を信仰と云ひ易ひものだ」と云つて容易に之に同意しませんでした。

保守的であつたクロムウエルは出来る事ならば英國建國以來の國體である王を尊び、英國民の國民性の基礎となつて居る君主政治を維持しやうとしたのであります。彼の一番恐れた事は内亂の再發であり、國內の秩序の破壊、そのための國民の困窮でありました。それ故クロムウエルは極力王の反省を促し、民意を容れられるやう懇請しました。若し王が到底聽かれないならば、せめて皇太子に讓位を願つても、王政を維持しやうとしました。然るに王はかやうな忠臣の苦衷を察せず、彼が自分に頼つて爵位を求めないので之を信用せず、反對にクロム

ウエルは自分が近衛の大將となり、その婿アイヤトンを愛蘭の總督としたさに王と交渉して居ると云ひ振らして彼を軍隊に不信用ならしめました。王は又議會と軍隊とを互に相争はしめて内亂を再發させ、その間隙に乗じてスコットランド軍を引入れ、その力によつて舊位を回復し、普通りの專制的親政を行はうと謀りました。之がため王は監禁を脱して逃去を企て、内亂は再び各地に起り、スコットランド軍は果して侵入して來ました。

クロムウエルは猛然立つて内亂を鎮定し、スコットランド軍をダンパーに撃破しました。此の頃であります。カーライルのクロムウエル傳に珍らしい一事件が載つてゐます。それは「祈禱會」といふ一章であります。

クロムウエルとその親しい軍人たちは一體どうしたらば此の國難を打開出来るか、英國に本當の秩序と平和とをもたらし得るか、何故軍隊はかく不信用なのか、私たちの義務は何であるかに惑ひました。彼等の或る者は、我等の御用は最早すんだ、今は武器を捨てて田舎に歸へり、平民として餘生を送るべしと云ひ、或る者は否、更

に進んで神の民のため、キリストに倣つて苦難の死を遂げやうではないかと云ひ、或る者は他に何か神から爲すべき事を命ぜられ乍ら、我等は不信のためそれを懈つて居るのではあるまいかと云ひました。そこで、彼等一同は神の聖意を知るために祈禱會を開いたのであります。

かくて彼等は或る日ウキンゾルの宮殿の一室に集り、終日祈りました。翌日も亦祈りのために費しました。此の日クロムウエルは人々に勧めて、我等は軍隊として又一個の基督者として、各自神に對してどんな罪を犯して居るか、そのためにこんなにまで迷ふのであるか、それを示されるやう祈らうではないかと云ひ、更に其の翌日一之で三日目です。又集つて祈りました。

彼等は此の日各自が神に對して犯した罪を自覺して、百萬の大敵も恐れず、鬼をもひしぐ勇者が相互に一言も發し得ず、一同聲を放つて泣きました。そして神にその罪の赦されんことを祈りました。どうでせう。今の世界に何處にこんな軍人があるでせうか。此の時彼等ははつきり、自覺しました。今まで自分らは人を恐れ、此の世の

政治論に惑はされて、神の御言にのみ頼らなかつたのが自分たちの罪であり、彼等が神に對して盡すべき義務は神の民を護ること、その信仰を妨げ、迫害し、神に仕へる事に邪魔をし、又英國をかくまで不安に陥らしめ、流血の慘事を惹き起した元兇を罰することだと云ふ恐ろしい確信の上に取り上つたのであります。

かくて英國の國體の中心、神の代表者、國民の父と云はれましたチャールズ一世は斷頭臺の露と消えたのであります。明に大逆事件であります。現代人には宗教氣違としか思へないでせう。然し之は人間の靈魂が行き詰つた舉句神に頼つて起つた最も嚴肅、最も正氣の沙汰でありました。クロムウエルは事こまゆかぬやうどの位努力し、そのためどの位人々に誤解されたかわかりません。然し一旦彼が神の聖意なりと信じて玉を除くことに決心した時は、最早世界何人も彼の意志を動かすことは出来ません。彼は斷乎として之を敢行したのであります。

事は承久の亂の時、北條義時が三上皇をお流し申たよりも遙かに深刻であります。正義は國家以上、神は全人

類以上、宇宙を主宰し、人は只此の神にのみ仕ふべく、之に仕へないのが罪、一切の人間の制度はその前には無價値である。これがクロムウエルを以て代表する清教徒の信條であり、そして之が英國人の國民性を高め、聖め之を改造したのであります。

議 會 解 散

王の處刑後、英國は王政を廢して共和政治となり、主權が議會に移りました。然るに此の議會は、王が最初之を召集して以來既に十四年の永きに亘り一度も解散せず舊議員中缺員が出来た時は只それだけを補充して來ました。議員中には腐敗したものもあり、議會は當然着手すべき改革をそのまゝにして居るものも多く、之がため次第に國民から倦かれて來ました。國民の請願は議會に提出されず、悉くクロムウエルに來るやうになりました。そこでクロムウエルは度々議員の主だつた者と會合して、新に總選舉を行ひ、民意に副ふ議會とするやう勸告しましたが、種々の事情があつて彼等は之を承知せず、

却つて議會を引續き解散しないといふ決議案を提出しやうとしました。此の案には國民全體が反對であります、殊にクロムウエル部下の軍人は大反對でありました。クロムウエルは部下の反對を出来るだけ抑制すると同時に議員に此の決議案を通過させないやうに勤めました。

それ故一日主だつた議員たちが彼の家に相會し、暫く之を決議することを中止するやう約束しました。然るにその翌朝、此の決議案が突然議會に提出され、將に通過しやうとして居るとの知らせを受けました。之を聞くやクロムウエルは大急ぎで一議員として登院し、最初は穩かに討論を聽いてゐました。然るに今や將に討論終結、採決に入らうとしました。其の時彼は猛然として立ち上り、其の不當を鳴らし、宛かも夜叉のやうな凄まじい形相で議員を睨み廻し、地彈駄踏んで、不品行の議員を面罵し始めました。或る議員が「此の議院の壁の内側でそれは聞き慣れない言葉だ」と叫びますと、クロムウエルは

諸君は議會ではない。そうだ、議會ではないのだ、

わしが諸君の任期を終らしてやる。

You are no Parliament, I say, You are no

Parliament. I will put an end to your sitting.

かく云つて自分の護衛兵を引入れ、之に命じて議員を議場から追ひ出させました。議員はその勢に辟易して皆そこそこに議場を退出しました。只議長のみは席から立ちうとせませんでした。それ故クロムウエルは部下に命じて『あの男を引き下ろせ』と云ひました。議長は引下ろされるまでは席を退かないと頑張りました。そこで、クロムウエルの部下の一軍人が、『それでは私がお貸しませう』と云つて、彼を議長席から下ろさせました。怒氣に満ちたクロムウエルは議長席の上に在つた英國の主権を表示する笏を見て、こんな木偶はどこかにやつて仕舞へと命じ、議場を閉鎖させて仕舞ひました。

クロムウエルは始めからかやうなクーデターを行ふ考は少しもありませんでした。議場に出て、議員が餘りに不誠實であつて公約を重んぜず、國民に對して虚偽を行はうとするのを見て、突然義憤に燃えて此の暴力を振つ

たのであります。彼の行動は明に違法であり、此の點は辯解の餘地はありません。然し乍ら、それは餘りにも神の正義を思ひ、英國を思つたからでありまして、少しも自分の顯榮のためではありませんでした。

共和國の議會は彼の暴力によつて解散されました。然るに國民は誰一人之を憤るものなく、却つて大喜びしました。『一匹の犬さへも吠えなかつた』とクロムウエルは後で申しました。その位此の議會は國民に倦かれてゐたのであります。其の頃こゝいふ歌がはりました。

鬼のやうなオリバーが

魔物のやうに議院に來、

眞赤に燃えたその顔に

議長は恐れて啞となる。

出てゆけ、

お前たちは長尻だ。

終りの審きの來る日まで

こゝに座つてゐるつもりかい。

此の時程クロムウエルが國民に好評を博した時はありませんでした。多くの者は彼が王になることを望みませんでした。然し彼に取つては議會解散は彼が前からの計劃でなく、まして王となるためにした事ではなく、長い間忍んで居た義憤が突嗟に勃發した事であり、假令それは國民に歓迎されましたが、事自身は明に違法でありましたからクロムウエルは王になるなどは思ひもよらず、速に適法の議會を召集して、今圖らずも自分の双肩に落下した英國の主權を之に譲ろうとしました。

然るに彼が召集しました議會は無能でありまして、彼に權力を委託して自ら解散し、その後で召集した議會は二度も彼に王たる事を請願しました。クロムウエルは勿論之を拒絶しましたが、彼は事實上英國の無冠の帝王となりました。そして和蘭を挫き、英國の海上の發展の基を立て、又歐洲の新教徒と大聯盟をして舊教徒に當らうとして佛及びスペインと戦ひ、段々海外に勢力を延ばし、内は英國に敵するスコットランド及び愛蘭を平定し、今日の大英國の基礎を作つたのであります。

然かも彼の目的は現在の世界の諸國が試みつつあるやうな、此の世界的大帝國を建設することではありませんでした。彼の第一の目的は此の地上に神の聖意が行はれ、神の御名が祟められ、神に召された神の民がその聖意を行ひ得る聖徒の國が出現することであり、彼の根本精神は神と神の民との御用のために獻身的奉仕をすることでありました。彼は神からそのため召されたものと信じて生命を擲つて働いたのであります。只神の聖意さへ尊重され、正義さへ行はれば、此の世の制度は少しも變更する必要なく、王に對しては忠義、議會に對して誠實を盡しました。然し乍ら、神の正義に敵する者は王も議會も何者も之を赦すことは出来ませんでした。

それ故是が非でも一定の制度を維持し、一定の組織を建設する事を最大の目的とする者とは、或るところまでは同行出来ませんが、それ以上は共同出来ません。却つて彼等の敵となりました。クロムウエルは始め王政を維持しやうとして、遂に之を廢し、共和政治を完成しやうとして暴力を以て議會を解散し、自ら無冠の帝王となりま

した。此のためどの位誤解され、自を己高めるため權謀術數の限りを盡したもとして非難されました。然し乍ら彼は神に仕へる事以外に何の目的もありませんでした。自分について求めるところは、來るべき神の御國に復活し永遠に神から祝福されることの願望、只それだけでありました。彼は大病から回復した時總司令官にかく申しました。

拜啓、神の御意みこころにより小生大病より回復致し候。

小生は此の事により、神は小生に對して父としての慈悲を起し給ひしことを知つて喜び申候。小生は己がうちに死の宣告を受け申候、之れ死より甦らしめ給ふものに信頼し、肉に頼ることなき事を學ばしめられんために候。日々死することは福なる事に候。此の世に何の價值あらん。肉に於ける最善の人も物も無よりも軽く候。小生は只此の一事のみを善なりと存じ候。即ち神とその貧しく侮られたる民とを愛し、彼らのために盡くし、何時にても彼らのため苦しむこと之に候。此の事をなすに足るものとされた

る者は、神より大なる恩恵を受けたるものに候、此のために立てられたる者は（キリストとその體（教會）に固められ）、復活の榮光に與り得らるべく、凡ては之にて足り申候。

彼の理想はとてつもなく遠大であり、崇高であり、然かも此の世に於て彼自身について求め得るところはかく何物もありませんでした。キリストと共に死し、彼と共に甦り、永遠に神と共に御國に生き得ることでありました。神と義しくある事、これ彼の唯一の願であり、神から離れる事之彼の唯一の恐怖でありました。彼の家の執事をして日常彼に親炙したデヨン・メードストンが申しました。

彼の身體はがっちりして強く、丈は六尺二寸位。彼の頭腦は種々の寶の庫であり、又その店であつた。彼の氣質は恐ろしい程火のやうであつたが、焰は大てい下に抑へつけられ、又は他の徳性と一緒になつた。彼の天性は困窮して居る者に對し同情厚く、女々しいとさへ思はれる程であつた。神は彼に恐ろし

いといふことを知らない心を與へ給うた。只彼が恐れたのは自身が神に對する態度だけであつて、この恐は澤山あつた。然し彼が惱める者に對するやさしさは度を越えた。彼の内に宿つた以上の偉大な靈魂は土の家には多分宿るまいと思ふ。私は彼が充分理解された時には、十大偉人の一人に加へられるであらうと信ずる。

然るに預言者はその故郷に尊ばれずであります。彼が餘りに偉大であつたため、當時の人は彼を理解することを得ず、彼の死と共に清教徒の英國支配は終り、王政復古するや、彼の墓は發かれ、その屍は野さらしにされ次で焼かれた骨は川に投げ捨てられました。彼は生前から偽善者とされ、世の人は彼の行動の跡を見て、彼を奸雄と評しました。王の味方であつたクラーレンドンは『彼は奸惡にして地獄の火が彼を待つてゐる』と云ひ、議會の共和政治を最大の目的としたラドローは、『彼の度々の豹變は皆自分の榮達のためであつた』『國民は短期間に人間として可能である限りの幸福を達成しやうと

して居た。然るに一人の野心が凡ての善人の希望と期待とを臺なしにした』と云ひました。又有名な宗敎家、バクスターは『クロムウエルは善人であつたが、段々成功して來た時野心が出て來た。彼は凡ての敵を征服した時最大の誘惑が遂に彼を征服したのである』と云ひました。

當時ミルトンやクエーカーの祖フォックスはクロムウエルの偉大を認めましたが、同時代の人には彼は全く謎の人でありました。十八世紀になつても英の大哲學者ヒューム、佛の大文豪ボルテヤには偽善者か宗敎氣遣に過ぎませんでした。然るにクロムウエルは友人に送つた書にかく申して居ます。

小生は神は凡ての惡評の上に高く在し、いつか小生のやましからざる事を證し給ふならんと存じ候。小生は不平を云ふべき何の理由も無之候………神の御意なれかし。

その通りであります。此の天地は神の天地であり、神が支配して居給ひます。神に對して忠信であつた者はいつか證明されます。彼の死後百七十七年、カーライルが

彼の書翰と演説とを集め、之が解説を附して出版して以來最早彼の偉大、彼の眞實、彼の功績は何人も疑ふものはなくなりました。今では英國の偉人を祀るウエストミンスター寺院の軍人、政治家、及び宗教家の三つの區域を運ねるその中央に彼の像が建設され、永久に彼は天才的軍人にして、英國を混亂より救ひ、又今日の英國の基礎を置いた大政治家、然かもその心は私なく、只神にのみ仕へた大宗教家であつた事を表頌して居ます。

今の世界は甚だ不安であります。何れの國も社會はその根底から動搖して居ます。然し乍ら世界中何處が比較的一番安定して居るかと云へば、それは英國であります。英國民が English Gentleman と云つて世界に誇る徳性を有つて居るからであります。これは前にも申しましたやうにクロムウエル時代に深く培養されたものであります。英國の皇室は日本と同様人民に尊敬され、親しまれて居ます。多分現今元首の身柄が一番安泰であつて、爆彈の伺候を受ける危険の一番少ない國と云へば、それは日本以上に英國であると思ひます。これはクロムウエル

時代に王の慘ましい死があつた結果であります。實にチャールズ一世の血が英國の王室を潔めたのであります。

更に又近代世界の立憲政治の模範といはれる國はどこでありますか、英國ではありませんか、世界到るところ政黨の腐敗が叫ばれ、議會政治に對し不信の聲を聞きまします。然し英國では未だかかる非難を多く聞きません。之れクロムウエルが一度怒つて議會の不義を糾弾し、之を解散して以來、議會は再びかやうな不正を繰返へさないからであります。英國民が十八世紀十九世紀に於て海外に大發展をなし以て今日の日没を見ない國を建てた事は前に述べました。

此の事は何によりますか。第十七世紀に此の國に清教徒が起り、英國民を聖書の民とし、殊にクロムウエルが出て地上の帝國を願はず、神とその民とのために盡し、神の御國の出現、その正義の支配を望んだ結果であります。『まづ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれら地上の光榮、發展は汝らに加へらるべし』であります。

日本の將來

まことに英國をして今日の英國たらしめたものは聖書でありました。若し此の書が我が國七百年來鍛錬し來つた武士の魂の中に入り來た時、我が國民は今後英國民以上の精神的國民となり、彼等以上に世界的大業をなし、全人類に貢獻するでしよう。反對に若し我等が此の聖書を排斥し、眞生命から離れ、只空しく日本の國粹を保存しやうとするのみであつたならば、早晚我が國は他の東洋諸國民と運命を同じくし、沈滞、分争、滅亡に終るべきは必然であります。今や我が國は明治維新以上の國難に際會し、その正義は世界の諸國民に疑はれ、國民亦本當に據つて立つべき正義の何たるかを知りません。若しかくして數十年を經過せばその將來は眞に寒心に堪えません。

此の時眞に國を救ひ、之を滅亡せしめないのみか、更に之を聖化し、強化し、世界的大國民とし、世界人類の歴史に大なる貢獻をなさしめる途は只一つ。それは私の

いふ日本的基督教以外にありません。即ち鎌倉時代より鍊へられた日本武士の精神を以て、キリストを信じ、丁度英國の清教徒が聖書によつてその英國魂を新にしたやうに、我らも亦聖書によつて此の日本魂を新にする事でありませぬ。こゝに聖書は我が國民を改造すると共に、我が國民は基督教について新生面を發揮し、以て新しい文明を生ぜしめるものだと思ひます。眞の日本人の心魂を以て聖書を理解する事、之れ私が全生命を投げ出して國民の前に絶叫するところでありませぬ。

嘗て六百年の昔、僧日蓮は此の鎌倉の辻に立つて立正安國論を唱へ、國難に際し此の國を救ふものは只一卷の法華經あるのみと叫び、「此の身を法華經に替ゆるは石に金を替へ、糞に米を替ゆるなり」と云ひ、「縦ひ頭をば鋸にて打切り、胴をば稜鋒を以て突き、足にははだしを打ちて錐を以て揉むとも、命の通はん程は、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて死にせんと云ひました。此の偉大なる信仰家の精神を以て不肖私も今、此の由緒ある鎌倉の辻に立ち、再び此の地を世界的日本の眞精神の發源地とするため、假令身は窮迫、死に至つても、日本的基督教を叫び、一卷の聖書を我が國民に傳へずは已まないのであります。

九つの柱

塚本虎二

有名なる神學者シミール教授が、福音書の記事に於て、これだけは如何なる歴史家も歴史的事實として認めざるを得ざる、「絶對的に信賴すべき」「眞に科學的なるイエス傳の大黒柱」なりと言ひしものが九つある――

一 イエスが或る若者に答へて「なにゆゑ我を善しと言ふか。神ひとりの他に善き者なし」と言ひ給ひしこと（マルコ傳十・十八）。

二 「言をもて人の子に逆ふ者は赦されん」といふ、パリサイ人に對する言葉（マタイ傳十二・三二）。

三 イエスの親族の者が、彼を狂氣せりといひしこと（マルコ傳三・二一）。

四 「その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給ふ」なる彼の言葉（マルコ傳十三・三二）。

五 十字架上に於ける、「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」なる叫び（マルコ傳十五・三四）。

六 パリサイ人がイエスに天よりの徴を求めたときに「徴は今の代に斷えて與へられじ」といひて、之を拒絶し給ひしこと（マルコ傳八・十一以下）。

七 彼がその故郷ナザレに於ては、少數の病人を醫したることの外には、何等の能力ある業をも行ひ給ふことが出来なかつたこと、並に、彼等の不信仰に驚き給うたといふ記事（マルコ傳六・五、六）。

八 五千人のパンの奇蹟の直後に於て、「慎みてパリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ云々」と言ひ給ひしこと（マルコ傳八・十五以下）。これは五千人のパンの話の奇蹟と見ず、イエスの言が如何に多くの靈を飽かしめ得るかを示したる一の譬であると見るからである。

九 イエスが洗禮者ヨハネの使に答へて、「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる」と言ひ給

ひしこと（マタイ傳十一・四、五）。「貧しき者は云々」より推測すれば、盲人、跛者等は皆靈的に解すべく、奇蹟を羅列したるものでないから、との理由である。

以上は何れもイエスの超自然的能力を否定し、奇蹟を否認した記事であるから、後代教會が勝手に之を捏造したと想像すべき理由は少しもない。従つてこれは絶対に信用すべき記事である、といふのである。寔に道理に叶つた主張である。多分何人もこれには異論を挟まないであらう。

しかし、若しこの九つの事實が科學的に確實なる事實として承認されるならば、それで充分であり、基督教は科學的に鞏固なる基礎の上に立つのである。何故ならば我等はこの九つの事實から、僅に基督教を再建、造することが出来るからである。

親族の者にまで狂人と言はれ、遂に十字架上に絶望の叫びを發して死んだ人、併し盲人に靈の光を與へ、罪に死んだ人を甦らせることの出来た人、否、二千年後の今日までこれが出来る人、こんな人は、自分では神でない

と言つたとしても、神でなくて何であらう。

尙、この九つの、明白にイエスの神性を否定し、その「有難味」を減する如き記事を、正直に大膽に書き傳へた聖書記者の書きしものであるならば、我等は一見不合理と見ゆることであつても喜んで之を信じたく思ふ。また信すべき義務がある。

基督教は學問ではない。故に科學の基礎の上には立たない。假令現代科學が如何に鋭きメスを振つても、我等の信仰を如何にもすることは出来ない。ただ、現代科學の鋭き解剖によつても、假りにこの九つが「眞に科學的なるイエス傳の大黒柱」として残るならば、それだけでも充分であると言ふまでである。

十九世紀の聖書批評が破壊的であつたに對して、二十世紀のそれは建設的である。今や基督教は科學的にも、この九つの柱によつて支へられず、より多くの、より堅固なる柱の上のうち建てられつゝある。

事實は頑固である。眞理は勝ち誇る。聖書が基督教會を作つたのではない。聖書の前に教會はあつた。現在の基督教的文献が悉く滅失しても、基督教は立つ。

基督教は神の子キリストなる永遠の巖の上に立つ。

汝自身たれ

三 谷 隆 正

さき頃滿洲問題調査の爲め國際聯盟から派遣せられたリットン卿が東京に滞在中のこと、卿は要路の或る日本人に向つて、日本にはリベラリストは居ないのかときいたさうである。いかさま其當時の日本の新聞雑誌の論調を見てゐたらば、日本には自由主義者は居ないやうに感ぜられたであらう。また事實日本には眞の自由主義者は殆ど居ないと言つていゝと思ふ。何故ならば日本人は眞の個性主義を知らない。謂はゞ日本は封建的な團體主義から一足とびに社會主義にとび移つて終つたので、個性主義の洗禮を充分に受けて居ないのである。

それについて、音楽家シゲツテイ氏の聴衆日本評が面白いと思ふ。昨年晩秋の頃であつた。或る日の新聞紙上で讀んだのである。氏の評によると、日本と西洋とでは音樂會の聴衆の持味が大分ちがふといふ。西洋の音樂會

だと聴手個人々々の個性的評價が、演奏者にとつての主たる手應へである。然し日本での演奏會ではさういふ個性的手應へはない。その代り會衆全體が力強い一團となつて、随分熱心に反應して來る。この強烈なる集團的反應が音樂會に於ける聴衆日本の特色である。かうシゲツテイ氏は言ふのである。流石に藝術家は敏感である。鋭く日本人の民族的特性を握つてゐると思ふ。日本人程集團的に動く民族は世界に類例がないかも知れない。多分此特性あるが故に、倭小な日本人が團體の大きい連中を向に廻して威張つて居られるのであらう。

然しそれにしてもである。日本人は餘りに集團的に動き過ぎはしないか。日本の社會は個人の獨特なる個性發揮に對して、餘りにも寛容を缺き過ぎはしないか。學界を見て、藝術界を見て、政治界實業界をみても、何といふ個性の暴壓、流行の跳梁であるか。學問も流行、思想も流行、藝術も流行、事業も流行。流行を追はずんば人にあらずである。現代の若人達の關心の専ら集りつゝある所は何であるか。滔々たる流行圈外に屹立して、

剛毅に自家の個性と其個性の衷より迸る所の眞實なる要求とに従ひつゝある魂がいくたり居るか。老ひたるも若きも、日本人は餘りに自分自身でなさ過ぎる。餘りに周圍に和し過ぎる。宗教に關してさへさうである。何故もつと大膽に自分自身であらうとし、自分自身の考へを考へようとなさないか。此事を想うて私は時々なさげなくなる。私は固く信じて居る、私が私として此大宇宙に貢獻し得る最大の業績は、私が私自身である事であると。私は天下に私自身を完全に眞似し得る者は一人もない事を知つて居る。私は私のみの全うし得る獨一無二の天職を持つて居る。良かれ悪しかれ、私は私として天下一品である。何を好んで他人の物眞似をしようぞ。

少し前の事であるが、或る學生達の廻覽雜誌に投稿を求められた時、私は上記の如き趣旨の短文を寄せて、何をして、人眞似だけはするなと提唱した。其時思ひ出したのであるが、今から二十年前、私がまだ高等學校の生徒であつた時分にも、私は矢張り同じやうな主張を持して、其主張を或る機會に己むを得ずして英文でものした

事があつた。その頃私の特愛の文章はエマソンの *Self-reliance* 自恃論といふエッセイであつた。殊にその中の *Be yourself!* と云ふ一句であつた。「汝自身たれ」。この一句となら心中してもいゝと考へた。ちやうど其時分である、私が内村先生の講筵に列して聖書を學び始めたのは。

それ以來私の人生觀は根本的に革まつた。いくつかの紆餘曲折もあつた。然し私の人眞似排斥論だけは依然として變らず動かす。最近は又廿餘年前に逆戻りして大に熱を加へつゝある有様である。然るに社會は此二十數年の間にすつかり一變して終つた。個人主義と個性主義とはひと昔前の古物であつて、今は社會主義團體主義全盛の世の中である。其勢に乗つてか、近頃ではカトリック教會側からプロテスタント教會乃至無教會に向つて、切りと其個性主義を排撃する聲が聞える。此情勢は世界的である。例へば現代の哲學がカント的個性主義的自信を失つて、中世の實在論的哲學、就中トマス・アキナスの哲學に復歸せんと欲するかの氣配を見せてゐる。カントの

コペルクスの轉向を逆轉して、徹底的に個性を絶した境地に立脚の地を得たいといふのである。尤もな要求ではある。さうして尤もであるだけそれだけ、この要求の影響するところは深刻である。現代に對するカトリシズムの潛勢力は、中々ひろく且深い。「人は生れながらにしてカトリックなり」といふ。よく言つたものだと思ふ。

これが今日の情勢である。それなのに二十年一日の如く、相も變らぬ個性主義で終始してゐる私は、時代にとり殘されたる迂愚の老書生なのであらうか。或ひはさうでもないかも知れない。然し時代にとり殘されることが何故いけないか。若し時流を云ふならば、基督教などは時代後れの尤なるものである。然し時代が基督教をさばくのでなくして、基督教が時代をさばくのである。若し個性主義が眞理であるならば、時代にとり殘されようが、世に棄てられようが、それを怖れて眞理たる個性主義を棄てることはできない。若し又私の信するやうな個性主義が誤りならば、私は私の無教會的信仰をすてなければならぬ、進んではカトリシズムを承認しなければならぬ。

私にとつては個性主義の問題即信仰問題である。

讀者よ、少しく自分に即しての昔語りを許したまへ。

私が高等學校三年生の秋、當時大學に在學し又は既に學士たりし先輩達十數氏の驥尾に附いて、私は初めて柏木の御宅に故内村先生を御尋ねした。其夜は先生が我々の同勢二十名餘りを引見せらるべく、特に用意せられた夜であつた。同勢のうち二名を除き、他はすべて新參の聴講志願者達であつた。正面に和服を着流しの先生が座られ、それに向つて學士學生生徒の順でかしまつた。先生は先づ最前列の學士連に質問の矢を向けられて、諸君はいつたい何を求めて私の所に來るかと問はれた。答が直ぐには出て來なかつた。さうすると先生は再び問はれた。人生に於いて一番大切なものは何であると思ふかと。後の方に座つて先生の御問ひをきいて居つた私は、はつと思つて考へた。いつたい人生に於いて何が一番大切なのであらうか。先生のあの問ひに對して、自分は何と答へようか。瞬時として私は私の答を用意してしまつた。先生の問ひが私のところまで廻つて來たら、私は躊躇せ

すに答へるつもりであつた。それは私にとつては私自身でありますと。何といふ傲慢な答か。然し又なんと正直な答ではないか。たゞ幸か不幸か私のこの答は其夜私の胸の裡に用意せられたゞけで、終に私の口の外に出る機會を得ず、随つて又先生のそれに對する直接の御返答もつかゞはずじまひであつた。然し勿論實質的には其後何度も何度もくりかへして、故先生は私のこの秘められたる答に對する答を重ねて下すつたのである。

こんなにして私が茲に臆面もなく私を語るのは、私のこの秘められた答が、私一箇にのみ關する私話でなくして、二十餘年前の日本の青年學生の少くとも或る一部を代表するやうな公性質を持つと考へられるからである。二十年前には私のこの答に共鳴したであらうやうな青年が、高等學校や大學にはうよ／＼して居たのである。然し現代では如何。一寸見ると二十年前とは丸でちがつてゐる。然し青年の偽らざる本心をきいたらば、恐らく現代と雖も、多くの青年が私の秘められたる答に共鳴するであらうと思ふ。のみならず、青年は一度はかうした自

己中心の世界に住してよろしい。その權利、否その義務さへもつてゐる。赤ン坊は利己的に乳ばかり求めて泣きわめく權利をもち、青年は自分を堀りさげ、自分一個のみ即して世界を觀する權利をもつ。さうしないと大きくならない。

然し人はいつまでも青年の特權を許されるものではない。ぢきに大人になり、大人としての責任を負はねばならぬやうになる。然らばその大人としての責任とは何であるか。それは一言にして盡きる。青年の特權を棄てることである。自分一個にばかりかまけてゐないで、他人の事、社會の事、天下國家の事に従事することである。孔子の所謂三十而立である。私は數へ年二十九の夏から其翌年の春にかけて、養病の爲め再び湘南の某地に居つた。その時私は健康的にも精神的にもひどく行き詰つて居つた。その時私を援け起して、私に大人の心を興へてくれた者は、カール・ヒルテイ先生であつた。私は先生の其方面の著書十數種を片端から貪り讀んだ。二十代から三十代にかけて、我々が青年から中年にかはる頃の實

實際的指導者として、ヒルテイ先生位いゝ先生を私は他に知らない。

大學を出る頃の私はどういふものかひどく東京を嫌つた。肉體的にも精神的にも、東京に住つてゐることがいやでいやでたまらなかつた。早くこんな所を去つて、もつと静な所に住つて、何人の顔も見ずに、たつた一人で存分に歩いて見たくてたまらなかつた。だから學窓出ると早々中國の某地に赴任することになつて、或る静な夕方、小數の親しい人々に見送られて東京を後にした時は、何とも言へぬせい／＼した氣持になつた。ごみごみした室の中から、廣々した青野原に出て來た時のやうな氣持であつた。爾來數年私は存分に獨り歩きを試み、たんのうするまで自分の臍をかへり見た。さうして行き詰つた。さうして悟らせられたことは、人生に於いて一番大切なものが、或る自分を絶して他なる者であつて、決して自分自身ではない事であつた。そこで始めて私は大人になつた。それは私にとつては畫期的な轉向であつた。聖書が眞に偉大なる書物であることを知り出したのも、

その時以來の事である。私の平凡な生活の流が、兎に角こゝでどかんとひとつ瀧津瀬をなして奔流した。

今や私の存在理由それ自身が私より他なる者である。私の生活の意味は一にこの他者にかゝつて居る。神様は絶対に私一個を超絶したまふ。すべてはその神様のためである。私一個などは問題にならない。唯私としての最善を用意して、それをそつくり聖前に献上すればいゝのだ。さうだ、その爲めの學問だ、また職業だ。私は自分の心身共にめき／＼と元氣づいて來たことを感じた。やがて私は永い間遊つて居つた結婚を敢行した。敢行したなどいふ言葉遣ひは可笑しいか知らぬが、私の其時の覺悟から言へば、まさしく敢行である。或る悲壯にちかい決意を固めての敢行である。多分私の其時の覺悟は、嫁ぎ行く婦人のそれに似て居たであらうと思ふ。兎に角私としては中々深刻な意氣込みであつた。勿論自分の家庭的幸福などを第一の眼目にして居るものでは、決してないつもりであつた。

然るに實際結婚してみても私は驚いた。私のつもりでは

結婚といふことは、私と妻と心をひとつにして自己を神と人との前に献上することであつた。例へば結婚によつて、私は従来よりも一層濃かに隣人達をかへりみるやうになれるつもりであつた。然るに實際はむしろ私のつもの逆であつた。私は俄然として私の全愛を或る一人によつて占領せられて終つた。私は面喰つた。悲しくなつた。結婚は私の敢行ではなくして、私をして一層微妙複雑なる關係に於いて、一層深刻に自己一個に執せしむるものでしかなかつた。是は私にとつて容易ならぬ痛棒であつた。言はゞ痛烈なる幻滅であつた。私の夢みたりし期待が餘りに大き過ぎたのであらうか。

然し勿論幻滅ばかりではなかつた。矢張り結婚は敢行に値する事であつた。たゞなんとしても私の結婚生活は餘りに短かつた。たらはぬ私達二人が微弱なる力を合せて、僅に一年半ばかりを勵しあつたに過ぎない。天に在る彼女はいざ知らず、私には結婚生活の奥義を語る資格がない。唯ひとつ私の知つて居ることは、詩人テニソンのいはゆる

*It's better to have loved lost,
Than never to have loved at all.*

「ひと度愛して、後失へるは、終にひと度も愛せざりしに勝る」である。我ら愚なる者なりと雖も、我らの眞摯なる想ひを、神様は決して恥ぢしめ給はないであらう。

その日から既に足かけ十年、前にも言つた私の秘めたる答の日からは、既に二十餘年を経た。今日若し誰か私に對して、人生で一番大切なものは何であると思ふかと問ふならば、私は必ずや答へて、二十餘年前の私の秘めたる答の正反對を言ふであらう。にも拘らず、私が自己一個を愛惜するの情は、二十餘年前にまさるとも劣らない。それは唯單に私がさきの日の主我癖を棄て得ないのではない。成程私の主我癖は昔に變らず執拗である。然し私は一度この主我癖に戦を宜して終つた。而も永遠の戦を宜して終つた。矢盡き刀折るとも此戦をやめることは出来ない。然り、この戦の故にこそ、私は自分を愛惜する。此戦の戰士として愛惜する。

古今集であつたか新古今集であつたか、

ある時はありのすさびにうとかりき

なくてぞ人はこひしかりける

といふのがある。私は死別によつて初めて一人一人の持つ全重量を知るに至つた。一人一人はそれが愛の衡を以て量らるゝ時、いかに絶大なる重さをもつものである事か。

私はそれによつて初めて愛といふものを知つた。愛とは個を愛惜することである。人についてさうであるばかりでない。物についてもさうである。例へば茲にひとつ古ぼけた缺け茶碗がある。この缺け茶碗は然し千利休愛用の古茶碗である。さうなると其缺け茶碗が千金に値するやうになる。人が此一個を愛惜するからである。さうして此一個は天下に唯一個の個であるからである。それが愛である。愛は個を愛惜するものなのである。

聖書に神は愛なりと書いてある。神は其獨子を賜ふほどに人類を愛したまへりと書いてある。一匹の迷へる羊を探し出す爲めには、九十九匹を野に置いてまで、八方手をつくし給ふと書いてある。新約の福音は要するに、神は人類を一人々々愛惜したまふと言ふことである。人

間は抽象的概念的にしか、全人類を包括することができない。人間の限られたる智能を以てする限り、全人類とは一個の抽象的概念に過ぎない。然し神様はさうでない。神様にとつては、人類全體がたゞちに又具體的個別的なる聖愛惜の對象である。そこに神様の頭脳と心情との偉大さがあるのである。

それが證據には、人爲の加はるところ常に單調あり、神の自然の支配するところ常に千紫萬紅端倪すべからざる變化がある。歴史は繰返すといふ。然し人はくりかへしても、神はくりかへし給はない。歴史に全き繰返しが無いことは、何よりも雄辯に歴史の裡に働く攝理を實證するものである。歴史の公式化は有限なる人智のあさはかなる悪戯に過ぎない。歴史の裡に秘められたる神の意圖は、常に必ず人間の意表に出づる多趣多彩さを持つ。是は餘程大きな頭でなければできない藝である。人間の頭ではできない。

だから人間が支配しようとする時、必ず其處に生彩の乏しい單調と硬化とが生れる。例へば幾何學的な庭園が

できたり、没趣味極まるビルディングが林立したり、畫一的な學校組織が固まつたりする。その根本的動向は個性の滅却である。その支配が行き届けば行き届くだけ、個性は抑制せられて、概念的な一般性だけが幅をきかす。随つてそこには器用にまとめられた片づきがある。一見

いかにも整然として秩序立つて居る。然し要するに幾何學的庭園である。神の造り營み給ふ樂園は、そんなものには似ても似つかない。カトリシズムは幾何學的庭園である。信仰の事に於ける畫一教育主義である。

然し神様は宇宙萬物のどれひとつとして畫一的には造り給はなかつた。現代の製靴機は一時間に何百何千足の勢で、全く同一型の靴底をどしどし裁つことをする。然し神様はそんな機械的な働き方を爲し給はない。神様こそは純の純なる藝術家でいまし給ふ。神の造り給ふものは、一草一石と雖も醇乎として個性味溢るゝ神品である。況や人間一匹に於いてをや。人間利休が愛用したといふだけでも、古茶碗に千金の價が生まれるのである。ましてや神様が手塩にかけ給うた人間一匹である。且又その

神様が愛であり給ふ。個を愛惜し給ふ。我らも亦人間一個を愛惜せずして已み得ようや。然り、他の如くに亦自分一個をも愛惜せずして已み得ようや。

太陽は地球と異り、地球は月と異る。火星は赤くかゞやき、木星は青くひかる。櫻に櫻の使命あり、柳に柳の天稟がある。ひとはひとに造られ、私は私に造られた。

神様は製靴機の如くには造り給はない。我ら一人一人が藝術品である。機械製ではこんなに変化の豊かな趣は出ない。我ら一人々に特有の趣があるのである。この自家特有の趣を殺して他を真似るものは、とりもなほさず、神様の聖趣向を變へて、其代りに勝手な人間的細工を置かうとするものである。隆鼻術とやらによるパラフィン製の鼻みたいなものである。それ程の養濟はないと私は思ふ。こゝに私の個性主義の理由がある。

神の國と人の國との根本的差別は何にあるか。それは人智を以て付度するに難いことかも知れない。然しこゝにひとつ明かな事は、二者が其國家的構成原理に於いて全く異なることである。ひらたく言へば、神の國と人の國

とでは其憲法が丸で違ふ。神の國は神の支配し給ふ國、人の國は人の支配する國である。人が支配する限り、そこには何等か人爲的な統一策がなければならぬ。人の國に關する限り、個性主義の原理は究極は無政府主義の原理である。國を爲すためには何等か没個性的な統一を策しなければならぬ。然し神の國は人爲による統一策は要らない。神様の頭脳はもつと大きい。神の國の聖統一は、個性主義を包容して餘裕綽々である。アナルキートの心配などは要らない。その驚くべき超統一の統一が、神の國の機構に於ける根本的特質である。だから事の神の國に關する限り、私は一切の人爲的統一策を排斥する。すべて人間の頭で考へて直ぐ其統一性が判るやうな種類の統一を排斥せざるを得ない。神の國の統一はそんな貧しい統一ではあり得ない。

たゞ我らの視野狭く、悟る所鈍くして、神の大統一を捕捉するちからがない。随つて我らの見得るところは、混沌として晦冥、甚以て頼りない心地のすることを禁じ得ない。それだものだから古來人間は色々の工風を凝ら

して、この頼りなさをなくしようとした。この要求が生み出したものが教權といふものである。さうして此教權を據り所として、人間の頭で直ぐ把握できるやうな、早判りのする神的統一相を眼の前に常設しようとしたのである。然し神様の成し上げたまふ大統一が、どうして人間の頭に早判りのするやうな小統一内に鑑詰めにせられ得ようか。それは明なる冒瀆である。カトリシズムの謂ふ所の客觀主義は斯の冒瀆に他ならない。即ちそれは人間の客觀を以て、神の端倪すべからざる大主觀に置き換へたものである。我らは左様な似而非客觀に安住することができない。

我らは我らの個性を尊重して決して人眞似をしない。我らは存分なる自家の個性的生活に安住して、統一の整頓のと騒がない。何故ならば、我らは神様の聖意圖に絶對の信頼をさしける。神様は私を私に造り、ひとをひとに造り給うた。私とひとと誠實眞摯に眞理を追ひ求めて走る時、神様がひとには眞理を授け、私には虚偽を押しつけたまふなどいふ事があり得ようか。ひとと私と各

々の意見の一致を求めて齟齬する必要は少しもない。ただひともしも飽くまで眞摯敬虔ならん事を期すればいい。たゞ一事の爲めに祈ればいい。たゞこの祈りに於いてのみ、ひとと私と萬人とひとつであればいい。これが眞の信仰の一致の發足點である。此發足點をぬきにして、他のいかなる點の一致を來すとも、それは要するに附焼刃である。神の國はそんな附焼刃では建たない。

現代は思想界混亂の聲を聞くことが久しい。然し思想界の混亂は必ずしも今始まつた事ではあるまい。いつの世にも思想界は多少共混亂してゐる。基督教界内については、パウロが奮戦した時代に既に基督教界内に信仰の大混亂があつた。斯混亂の中にあつて我らを支へ、我らをして眞理を誤らざらしむるを得るものは、要するに神様御自身である。神様御自身以外に我らの信頼に値する支へはないのである。教權頼むべからず、教師恃むべからず、恃みになる者は我らの救主イエス・キリストのみなる神のみである。然り、彼に恃む時、我らは絶対に安全である。語るに友なく、訪ふに師なくして、唯獨り

在るともよし。彼に訴へ、彼に恃むことができるならば我らの行く手には誤りなく眞理の光が照るであらう。

神様の御加護に對するこの信頼ある時、我らは安心して獨り歩きせざらんとすとも得ない。それは主我的自恃でなくして、神様に依存して晏如たる太平樂の氣持である。世にも暢々した自由な境地である。斯かる時我らは己が個性を喜び伸ばさざらんとすとも得ない。あるは烈々として火の如く燃ゆべし。あるは湛々として淵の如く靜もるべし。健なるは健なる者の如く、疾ある者は疾ある者の如く、才學ある者は才學を、たゞ忍耐あるのみなるものは其貴き忍耐を、各々自由に人眞似でなしに伸ばせばいい。然る時神の聖意圖は各自を其個性のまゝに愛惜したまうて、人間的才智の想像を絶するやうな、活驅使を就けたまふであらう。

柏木通信 (第三十二信)

齋藤宗次郎

柏木の近状

人生患難多し、去れど悲歎に沈むべきでない。之によりて人の心は試され、信仰の道は開かれ讚美の里は視界に映じ来るものである。神の聖意に目覺め、光を仰いで世を渡らんことは我が願ひである。七月二日夜、編輯會議席上に於て、鎌倉の江原主幹病むとの報三谷氏によつて告げらるゝや、忽ちにして教友の間に傳はり、互に胸を打つて同情し、神の榮光の爲めに再び肉の健康を靈の前に置かれんことを切に祈つた。○内村靜子夫人には主の恩恵に沐する銷夏の地として思出多き沓掛星野の閑邸を選び、七月八日朝出發せられた。上野驛頭に於て留守中の用務を託されし後、秋風に壯健の身を乗せて歸つて來ますとの預言的希望の言は窓外に爽かに響いた。全集の大業に日夜重任を感じらるゝ夫人の爲に祈らざるを得ない。○臺灣に生れて夙にイエスの僕となり、同胞の爲に福音を傳へつゝある青年許鴻謨氏は、内村先生の勞働場たりし書齋と講堂とを參觀せんことを請ふて來た。余は暫時校正の手を休めて書齋に導いた。

彼は謹嚴なる態度を以て、佇立のまゝ、隈なく見廻して後實に質素なものですなと驚歎の面持を示して去つた。衣食住に腐心する現代人の社會に於て、先生の生活の跡を見る時には聖書の言と對照して深く悟り大に學ぶことがあるのである。氏の素朴の一語は意味深長である。○破壊を計劃する地下運動者の活動の態は余輩の知る所でないが、柏木に於ける建設の爲の勞作は見るも欣快の至りである。此方には内村全集編輯會議が開かれて、眞理をして眞理其物の活動を圓滿ならしむる途を講究するあれば、彼方の講堂には、藤本名古屋大賀の諸將汗に浸りつゝ夏期御殿場の集會の爲に、天下の同志に對し完全なる報道の方法を執り居るを見る。此の私心なき活動は常に表裏透徹神明に通ずるものあるを覺ゆ、信仰に歩む者のみ其終は全し。諸人心せよ。

日曜の集會

必ずしも自覺を要しない、必ずしも宣傳又奮勵を要しない。靜かに祈り、明かに十字架を瞻上げ正しく主に從へば足る。塵埃の如き我等は何故に同胞に先だちて救はれしか、我等少數の者が殆んど無意識的に此處に集つて神を讚美し、聖書の眞理を學び、生命の實體を賜はり、又何事かを爲さしめられ行くは何故か我等は知らない、神識り給ふ。我等は只一事を知る。單純に信ずることに由つて心燃え、愛と望みの絶間なく流れ

出づることを、善し去らば、此まゝに何時までも続け行かう。主よ永遠に我等の主たり給はんことを。

希伯來書を讀みて

永井 久録

現代世相と理想國の預言

大島 正健

『大なる婦人』

峯岸 兵作

パウロの第一回傳道

山崎 儀市

代表者としてのペテロ

齋藤宗次郎

全集製本所を觀る 内村全集の配本に際し、新たに之を手にする人は、誰人も感謝と歡喜と希望とを以て之に對するであらう。されど此處に達するまでの經過を仔細に考へる人は少ないことと思ふ。此全集と雖も墨と紙とを體とし麻の衣を纏うて世に出づるのであるから、其構成の一般的過程は他の書冊雜誌と何等異なる所がない。然し其内的精神上的の準備と苦心とに至つては祈禱と斷食に出づるもので、將に十字架の生命を基とするものである。曾て内村先生の手に成りし或る原稿が、一旦編輯主任の机上に現はるゝや、先づ彼の篤き祈によつて天の作業に隸屬することゝなる。愈々彼の鋭き心と目とによつて、其一切の齊整成るに及んで初めて印刷所に移り、文選、植字、差替、大組の順序を経て印刷となり、前後七八回の校正によつて誤りは正され、次に頁は合はされ、正しく折られて後漸く製本所に廻るのである。或る日余

は全集の産みの苦みを分つ其工場を觀んとて、岩波書店出版部の藤川氏の同行を得、神田區本石町なる寺島印刷所に入つた。時は恰度二十餘人の白衣の青年は、各々其職場に就いて靜かに『講演上』の製本中であつた。田中職長は十數回の工程を辿る分業の説明を試みて余の了得を助けて呉れた。裁斷壓搾等の二三器械に掛る外は、悉く工人の指頭を以てする巧妙の技能によつて、一々眞摯の精神を注ぎ行く様は甚だ喜ばしくあつた。彼等が一の汚點をも留めざらんとする注意、分厘の歪みをも來さざらんとする苦心、綴目の割裂を起さざらんとする努力を認め、炎天の下、熱膠の前、狭き工場に立ち並んでの作業を見て、勞働は神聖なりとの感を強くし、攝理の尊嚴と祈禱の力とを感謝すると共に、勞働者諸君に對する同情敬意の念の沸々湧き來るを覺えた。編輯の室を出でて製本の工場を參觀せしは甚だ有益であつた。一椀のレモン水を饗せられて愉快に辭し去つた。

田の面の風を浴びつゝ 洗足會の順番は余の家に廻つて來た。信仰の友を遇してキリストの愛と謙遜とを學び得るは何たる幸福であらう。手作の草苺は昨年にも劣る不作なれど、幸にも餐後の歡談を賑はすには充分であつた。六月四日午後矮屋をも恥ぢとせず、田の面を渡り來る天與の清風を入れて其處に例會を開いた。卓を圍

む十四人の顔は、天の一方よりする靈光によつて輝きを呈した。これ丈でも最早足れりであるのに、各自の表白せし感話と祈禱と實驗とは又尊きものであつた。一、宇宙間に羅列する星にして今日までに測定されし數は三十億以上あり、其内衛星を有するものは三百以内、而して人類の棲息し得る可能性を持つものは地球と金星火星とのみ。去れど其金星火星も亦氣溫の不調水蒸氣の多量等の故に人間に適せざること判明し、結局地球のみが人間の生息所たることとなる。地球も若し天然物のみならば甚だ荒寥寂漠たる物ならんに、其處に人間は生れ、其人間の爲に、神は其御獨子イエスキリストを賜はつたと知つて人一人の價値の如何に大なるものなるかを痛感するものである。此事を思ふと感謝であり又恐れでもある。

一、貧しき者は福音を聞かせらると主は意外の答をなし給ふた。其意味の極めて深遠なるを感す。一、福音を傳ふるに機を逸すべからざることの實例。一、十字架に磔り給ひしイエスは我既に世に勝てりと言ひ給ふた。勝利の方法は惨敗の狀であつた。我等も身を殺して他人を生かすの途を取らねばならぬ。一、世には大家と稱せられながら偏頗なる信仰を懷いて平然たる人があるのに、我等は處女懐胎、十字架の贖罪、復活、昇天、再臨等の凡ての大眞理を悉く公平に信奉せられし先生に學び、等し

く之を信するを得しは大なる感謝である等實に毎に優る美味であつた。黙する人も語る友も、心は共に恩寵の満喫であつた。余は黄昏近く阿佐ヶ谷驛まで歸途に着きし諸兄を見送つた。

日曜學校職員祈禱會

柏木日曜學校は生徒五十人に満たざる微々たるものである。然し美はしき歴史と重き使命と堅き獨立と高き希望とを有する點に於て注目すべき一存在たるを失はない。今回主任鈴木弼美氏は多年愛撫し來りし山形縣小國の農村に轉住することとなり、其後任として鈴木俊郎氏教務に當るに決せしを以て、七月三日關係者九名其教室たる今井館に集つて祈禱會を開いた。樂しき晚餐の後、齋藤茂夫氏司會の下に神を讚美し神に祈り、それより藤本武平二氏開校以來の歴史を詳かに話し、嘗て校長たりし石原兵永氏は懷舊を述べ、大賀一郎氏は先年大連に於て創始經營せし日曜學校の驚歎すべき事實經驗を傳へ、去る人は感謝を表し、新任の人は抱負を語るなど隔意なき心中の披瀝に天眞の哄笑さへ加はつて、信仰と誠意と歡喜とに満されし集會であつた是れ寔に該校の將來を卜するに足るものである。天地の神は日本國にも段々と偉大の産を起し給ふを見る。暗黒と壓制とは早く我國より滅び往けよ!

青木マツ子氏記念會

明治二十年春大阪に於て基

督信者となり、其翌年結婚せられし青木庄藏氏夫人の三周年記念會を六月二十四日夕神田美土代町基督教青年會館に於て舉行せられた。余も招きに應じて百數十人の間に出席した。式は野口、長田、網島諸氏によつて簡潔嚴肅に取行はれた。我等は夫人が家庭にありては禁酒運動の爲め内外を遍歴し、再臨運動の爲め献身活動せし夫君の爲めに内助の實績を擧げ、天滿教會にありては重要な職務を帯んで教師信徒を勞はり、多くの求道者を導きて主に仕へ、更に社會に向つては幾多の不遇を慰め貧窮を賑はすなど、與ふるは受くるよりも福なりとの精神を實現せる多年の犠牲的勤勞生涯の閱歷を聽いて大いに感じ、た次に食堂に於て井上永井額賀松村海老名諸氏の感想の間に、故人を導き給ひし神の恵みを思ひ又種々有益のことを感ぜしめられた。死せる人を記念して活けるキリストの生命を讚美するは善きことである。最後に述べられし青木氏の謝辭は、來客に對する赤誠を吐露すると共に純真なる信仰と再臨の日の希望とを明かにせるものであつて一同の心を敬虔に導き、歸り行く一人々々に緊張の歩みを執らしめた。嚴父百五歳を以て世を去りしと聞きしが、マツ子夫人の愛によつて圭角を脱し、今や屢鏢たる身を提げて強く信念に生くる青木老兄の爲にも、其命長かれと祈るものである。

青山會館の一夜 畔上永井蒲池氏等によつて此處に開かれし角筈舊友會は二三十年前の昔を語りて、信仰生活の妙趣に感興竭くるを知らなかつたと聞いたが、我等も一夜同所に集りて、現代に臨みし靈的恩恵の事實を探り、基督教前進の途に就て懇談した。義と愛とを均齊に實行するには充分に警戒を要する世なるを語つた。大嶋好本、石河、鶴田、高山、塚本、渡邊、秋元、加藤余の十名。

看 護 し つ つ

江 原 祝

七月號の身邊漫筆で主筆が最近健康が増し、大變元氣だと自慢しました處、それは一時の喜に過ぎなかつたので御座いませうか。あの原稿をノ切つて印刷屋へ出した十七日は來訪の友人と元氣に話して居りましたが、その夜半から背が痛み出し、翌朝高熱のため講話會に出る積のところ、已むなくベットに釘付けせられました。最初は講演や原稿の勞だらうと申て絶對安靜に致して居りましたが、數日経つてもよくなりませんので、當地の醫師を招きました。初めは呼吸面がせばめられ、胸部の

壓迫強く、自動車のタイヤにポンプで空気を入れるやうにして呼吸しなければなりません。醫師の云はれるまゝ塗布薬、服薬、其の他の處置を致し、尙少しでも動けば熱が高まりますのでいやでも絶對安靜を嚴守して参りました。十日目位から熱も大方下り、衰弱も稍々恢復し、呼吸が幾分楽になつたと喜んで居りましたが其の後はやはり一進一退、加ふるに暑氣と鬱氣は弱つたからだに一層倦怠の度を増したやうで御座います。

思へば長男を亡くしてまもなく發病して以來、長い療養生の内主筆が今度始めて經驗しました病苦は、急に起る呼吸困難で御座います。十分、五分、或は長い時は五十分間も息が十分に出來ず、全く文字通り悶絶苦絶する有様におかれるので御座います。此の苦しみと戦つて心臓は異常な活躍を続け、脈搏は百二十前後、最高は百四十以上數へ切れない程で御座いました。最近毎日數度ピタカンフルの注射を致して居ります。一體何の御心でかように「死のくるしみ」をなめさせられるので御座います。弱い身體で精力の全部を福音のため傾倒し盡して、このやうになるのは當然のやうにも思はれ、又神様はどうしやうとなさるのだらうと迷はされます。

しかし一方主筆のこの肉體の苦痛に反比例する心の平安もお知らせしなければなりません。高い熱のために苦

しげにうつら／＼乍ら、日本ともつかず、どこも知れぬ美しい景色の中を海に、山に、野に旅行を續けていゝ心地になつてゐる折もあり、母や姉妹や、同信の友の心からなる御祈と御同情とを滿喫して、日々喜び、何の恐もない平安さ。そのためもつと早く悪化するであらうと豫想されました心臓も只脈が早いのみで案外衰弱しない事に醫師も驚嘆して居られました。又無理矢理に横臥のままを強ひられて「すべて従順にしたがふのみ」と云つて居ります。發作の苦悶のまだ去らない時、側から私が「何とかして自分が代つて苦しむんだ」と申ますと「おれは日本の皆のために苦しむんだ」とうめいて居りました。眞に只神から來る平安のみがあるので御座います。

其後藤本武平二博士が御出下すつて精しく御診察して頂きました。肋膜に溜つた水が自然に引いてくれば、よい結果を肺にもたらすだらうとの事、肉體と信仰との不思議な關係を十分御研究の同氏の御診断に私共は本當に安心致しました。然し病状は相變らず一進一退、一喜一憂、毎日の容態の變化が激しいのと、食物が少しづつしか入りませんので憂慮致して居ります。

私は主筆が講話會を始めたばかりの時に當り、此の發病は一體どこに聖意があるのかを疑ひましたけれど、ど

んなに患難の中を歩ませられても、その時こそ尙神の御手が固く離れる事のない事を信じます。かゝる状態で御座いますので、今月號は全く執筆不可能となり、鎌倉講演だけのせる事に致しました。外に折にふれてメモに書きしるしたものを二ツ三ツ病床からの手紙と致します。餘りに御壯健でゐらつしやらないのに御多忙の中から三谷隆正氏の御寄稿を頂く事が出来て、ほんとうに悦んで居りますところへ、塚本虎二氏及高木八尺氏が一日病床を御訪ね下され、雑誌のことを御心配下され、特に高木氏は内村先生に誓つて五十歳まで沈黙を守ってお積りの禁制を破られ、友情のベストを表はして御寄稿下さいました事は主筆の悦はたとへやうも御座いません。高木氏は高等學校時代からの舊親友で、毎日必ず話題に、祈にある友だけに今度の友愛は無上の喜で御座いました。残念なことですが編輯の都合上來月號にのせさせて頂きました。尙塚本氏の御警務の中からの御寄稿を頂き、はからずも得難い寄稿を満載して今月號を折様のもとに送ることが出来ず。かゝる同信の友を持つ者の幸福は眞に天國の前味で、どんな、うゑも、はだかも、迫りも此の信仰を捨てることは出来ません。又かゝる病苦、それにともなふあらゆる苦難がいかに強く又繁くとも、それが天罰だとか、何か神にそむいてゐるのであらうと心にせめら

れる餘裕の無いまでに、神の子キリスト・イエスの十字架の愛にとりこにせられ、此の苦難も神の愛の外何者でもない事を信じます、かゝる近況は何ものともかへつこの出来ないもので御座います。いつも主筆の身邊漫筆を樂しみに待つてゐて下さる皆様にお氣の毒ですが病狀を御知らせしてそれに代えます。

鎌倉講話會の事

主宰者たる主筆病床にあるにもかゝらず、矢内原、山田、三谷、三氏の御熱心な御援助に由り、よりよい禮拜を持ち得た事は眞に有り難い。六月第三日曜は矢内原氏の「ゼカリヤの幻影」につき長時間力に満ちた御話があつた。ゼカリヤ書一章から六章までの幻影の内容に付き細かく一ツ／＼の説明を伺ひ、今の世にも變らない深い眞理と暗示を與へられた。ユダヤ人は神の都で神を禮拜するといふ事程切な希望はなかつた。それにもかゝらず絶えず周圍に迫害せられ、他國に追ひやられ、次第に状態が悪くなる。然し神を禮拜するといふ事が神殿禮拜でなく、手にて作らない靈的な信仰のみの禮拜といふ信仰にまで進ませられて行つた。この事は個人にとつても、信仰はいまだ見ざる處、望むべくもない時に尙望み、

うちのめされてゐ乍ら尙信する時に前よりもつと深められ、高められた處に立ち上るのだ。といふ事。皆が失望の中に在る時、ゼカリヤが一人希望をもたせられた。その信仰を示すには、どうしても此の幻影より外に方法はない。このまぼろしは皆信仰に由る希望である。最後に枝といふ人來りて神殿を修めるといふこの神の子を、ゼカリヤの時代には内容は十分でなかつたであらうが、我々はこの神の子として來られ、十字架上に罪を救つて下すつた人、いかに力強い祭司であり、王であるかといふ事を新約に於て知る事が出来る。我々の最後の動かない希望は神から來たキリストを信する信仰、しかも何邊くづられても最善をなし給ふキリストを信する以外に無しと結ばれた。くづほれた人が再び立つ力を與へられて散會した。

第四日曜は山田氏の「パウロの使命」についての御話があつた。吾々はイエスの單純なすつきりした親しみ安い信仰を輕んじてパウロの理窟ばい複雑な信仰を信じてゐるのではないかといふ疑問をもつ。パウロが眞實にイエスを傳へたのであらうか。イエスは只一度しか贖といふことを仰られてゐないのに、パウロはその信仰の中心が即ち贖罪である。パウロは福音と贖とを切り離し得ない問題であり、信仰を以てたて通さふといふ者には是非

とも必要な問題である。パウロはキリスト教に弓を引いた人であり、イエスの正面の敵であつた關係上、自身の罪のなやみを深刻になめた。恐らくロマ書七章の如き罪についての深刻な經驗は無い。イエスがパウロに顯はれて哲學上、又種々の學問をすべて粉碎し、全くの目くらにして仕舞つた。此の時全く殺されて仕舞つたのであつて、今まで背を向けてゐた神の方へと向き代つた。パウロの頃はイエスはすでに十字架にかゝり、復活してもう世にない時であり、ユダヤは亡びに近い頃であつた。若しパウロが此の時居なかつたならば、或はキリスト教はなかつたかも知れない。キリスト教がギリシヤに入り、ローマに入り、世界文明の中心に入つたのは直弟子たちの傳したキリスト教では足りなかつた。どうしてもパウロを要した。神は彼を呼びかけ、話しかけ、つかまへて啓示し給うた。死んだからといつて人を贖ひ得る人はイエスより外にない。イエスがあつたからこそパウロが救はれたのである。此の贖といふは一番深い問題であるから解りにくく、共祈りを以てロマ書を読む時にわかり得ると語られた。急の暑さの中に司會から全お獨りで然かも力のある、集會であつた。二回共病床に在る者の爲めに眞心よりの御祈に感泣した。

七月二日第一日曜は終末觀の問題と題して三谷氏の御

講演があつた。世の終末が豫言されてゐるにもかゝはらず、現在までいまだに來なかつた。然しキリスト教はいよゝ盛んになつてゐる。そして之によつて力強い何物かを得てゐる者が數知れない。之が何よりキリスト教に永遠性のある證據である。死後の事や終末の研究は極めて不健全な事であつて、狂信や、くだらない神秘思想はよしたらよい。具體的の事については知る必要が無いが死後は只暗い墓のかけに在るのみか、又人類の終局がいかになりゆくかを知ることによつて現在の生活の上に大きな變化が來る。故に重大な問題であると。

此の世をよくするにどうしたならよいかを各方面より語られ、然して結局裁判も、自由も、共產主義も、人間の自力も、又人間の英雄も世を人を救ふ事は出來ない。何か之以上強い力があるか、無いか。聖書が教へる終末觀は人間以上の天的の救がキリスト再臨の時に必ず神から來ると教へる。人世が只はてしない連鎖であるならば當底満足出來ないが、神は國家興亡を通して何か人類總がよりではたすべき御計畫を持つてゐられて、吾々の生涯も空にきするのでなく、人知の考へ得ないある驚くべき偉大な神のみつかさどる永遠なものがあるにちがひ無い。之が眞理であるか、眞理でないかといふ事は、人類の歴史が虚無であるか、充實したものかといふ問題で、

私達の罪を、ほこりを、すつかり十字架上にくだかれて、謙遜になつて後示されるのではないかと思ふ。聖書のすべては罪の問題を解決すればわかるのである。といひ盡せないが深遠な御講話であつた。一同しんと水を打ちたる如くなり、衷心より病む者のために御祈り下すつた。往來のチンドン屋の活動廣告の賑やかさに比して、神につく者と此の世との明かな對照を見た。

かくして四月以來恵に恵を加へられた鎌倉講話會は一と先づ休會となつた。七月第二日曜までとの廣告で當日遠方より御出の方もありしと聞き誠にお氣の毒なりしも主筆の病氣と會場の都合上止むなく休會となつたのである。秋よりの集會は神の御許を只待つのみ。

急 告

主筆病氣のため、來月號は定日より遅れる事があるかも知れませんから御承知願ひます。

又豫告なしに休刊する事がないとも限りませんから之も御承知下さいませ。

鎌倉講話會は更めて廣告するまで當分休會に致します。

宇宙の完成以外に我に慰めなし

私は此の度、肋膜炎、肺結核、即ち通稱肺病に悩み、古來此の地球上に生きて又死した數兆億、否無數の大多數が惱む此の病のどんなに我等人類の苦惱であるかを切實に實驗し、その如何に無駄な苦しみであるかを痛感した。

早く此の地が聖められ、虚無に歸せられたる萬物が復興し、義とされた者が復活する時が來ることを待つ。次のロマ書八章の句は私の衷心の叫聲である。

われ思ふに、今の時の苦難は、われらの上に顯れんとする榮光にくらぶるに足らず。それ造られたる者は切に慕ひて神の子たちの現れんことを待つ。造られたるもの、虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり。されどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる狀より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり。我らは知る、すべて造られたるもの、今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。然のみならず、御靈の初の實をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが體の贖はれんことを待つなり。

此の地球の完成、全人類の救、否、宇宙全體の榮化、これ以外に私を慰めない。而して私は救主イエス・キリストに在つて、此の希望をもつ。故に苦中、大歡喜がある。ヨブと同様に『我が心これを望みて焦る』(ヨブ記十九章二七節)

塚本虎二著 (獨立堂版)

日本人の基督教
定價 金 參拾錢
送料 四錢

矢内原忠雄著 (こひつじ社發行)

基督者の信仰
定價 金 參拾錢
送料 八錢

金澤常雄著 (一粒社版)

荒野の誘惑
定價 金 五十錢
送料 十錢

本位田祥男著 (日本評論社版)

歐洲の憶ひ出
定價 金 二
送料 十八錢

江原萬里著

宗教と國家
定價 一圓八十錢
送料 十四錢

— エレミヤ記の研究 —

聖書の現代經濟觀
定價 一圓二十錢
送料 八錢

思想と生活合本 送料不要

二、三年度 第一卷 二〇〇

四年度 第二卷 一、八〇

五年度 第三卷 二、三〇

聖書の眞理合本 送料不要

六年度 二五〇

七年度 二五〇

聖書の眞理定價 (送料共)

一部 二十錢
半年(六部) 一圓十錢
一年(十二部) 二圓十錢
海外一年 二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番) へ。獨立堂にてもよし。

昭和八年七月廿八日納本
昭和八年八月一日發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷 江原萬里
兼發行人

東京市澁谷區向山町九七
發行所 聖書の眞理社

東京市神田區三河町三ノ四
印刷所 今井印刷所

東京市淀橋區百人町二丁目二五四
發賣所 獨立堂書房
振替東京九六六番

(昭和三年二月十六日)

聖書之眞理 第七十號

【本誌定價二十錢】